

確かめたいものである。1980-81年をピークとする太陽活動期には、ひのとりや SMM の硬X線望遠鏡、VLA などがあったにもかかわらず、そのような観測がなかったのは、そもそも SN 比が十分あるフレアの同時観測が

少なかったこと以外に、硬X線望遠鏡の分解能不足、エネルギー域が低すぎたこと、位置合わせの不確定などの原因があった。しかし、次の活動極大期には、そのかなりの部分が克服されることが期待される。

雑報

天文・天体物理若手夏の学校

第15回天文・天体物理若手夏の学校は、1985年7月30日～8月2日に長野県小県郡真田町菅平高原の菅平総合センターおよび菅平ホテルにて開催されました。今回の担当は東京大学理学部天文学教室でした。参加者は講師1名を含めて123名で、昨年よりも更に増加しました。今回も、全体企画、各分科会、夜の部とも若手の活発な意見交換が行なわれ盛況でした。なお、今回は宇宙線夏の学校(参加約30名)と合宿となり、例年よりも広い視野にたった活発な意見交換ができました。プログラムの概要は以下の通りです。

○全体企画

テーマ:「大型光学赤外線望遠鏡計画(JNLT)」

講師:小平桂一氏

31日(午後) 望遠鏡計画

1日(午後) サイエンス

2日(午後) 運用体制

○分科会

31日(午前) 銀河形成I, 太陽系, 天体における粒子加速I(宇宙線と合同)

1日(午前) 銀河形成II, 観測機器, 天体における粒子加速II(宇宙線と合同)

2日(午前) 高エネルギー, 恒星・太陽, interstellar

3日(午前) 天文学と社会

なお、大型光学赤外線望遠鏡計画に関する議論については次の機会に発表したいと思います。また、集録に掲載していますので御希望の方は事務局(東大理・天文市川)までお知らせ下さい。

夏の学校に有形・無形の御支援を下された方々にこの場をお借りして感謝いたします。

今回は、名古屋大学理学部物理学教室が担当します。

(戒崎俊一, 市川伸一)

書評

光世紀の世界

石原 藤夫 著

(早川書房, 昭和59年11月20日発行, 定価16,000円)

天体のカタログは、従来から、さまざまな目的のものが数多く作られてきた。本書は、太陽からの距離に着目して編まれた太陽近傍恒星のカタログである。もちろん近距離恒星表は、研究者を対象としたものが、既にいくつかあり、本書のデータも大部分は、ウーリイ等(1970)の近距離恒星表からとっているが、一般愛好家をも対象にしている点がユニークである。

本書は、大きく分けると3つの部分からなっている。

まず、本書の主要部を占める星表である。これは、赤経赤緯順ではなく、距離順となっており、観測の利便よりも、近傍恒星の分布の把握に重点をおいたものとなっている。

2つ目は、近傍恒星の3次元位置を示した星図である。従来、我々の持つ宇宙像では、太陽系と銀河系との中間にあたる近傍恒星系に関する認識が、いささか抽象的であったが、本星図によって、運動まで含めた、きわめて具体的なイメージが与えられよう。また、このイメージは、太陽近傍のみならず、銀河円盤部の典型的な一

領域のイメージであることにも注意したい。もっとも、编者自身も指摘しているように、現代天文学では、星以外の成分——星間ガスや磁場など——も無視するわけにはいかないが、恒星以上に距離決定が困難である現状を考えるとやむをえないところであろうか。

3つ目は、総合解説書である。この本は、太陽近傍恒星系について、初心者にもわかりやすく、かつ、おもしろく書かれており、上記の星表・星図の意義や科学的精度についても触れている。また、SF作家兼科学者である编者の立場を反映して、科学啓蒙とSFとの立場のちがいを明記し、科学的事実と正統派SFとのあるべき関係にも言及している。

天文学の究極的な目標が、我々をとりまく宇宙の理解にあることを考えるとき、地球から観測するという実用的な立場をはなれ、我々をとりまく恒星を3次元的にとらえようという本書の試みは評価されてよい。一昔前の人々が、世界地図をながめて、地球像をイメージしていたように、太陽をとりまく恒星たちを3次元的にとらえる地図として一見に値する好書である。

(半田利弘)

尚、本書は直販で、書店での取り扱いはないので、『〒101 東京都千代田区神田多町2-2 早川書房(光世紀の世界係)』まで、現金・書留で申し込んで下さい。販価は送料込で16,000円です。